

3. (株)オリムでの活躍

激動の時代にあっても着実に技術の向上に精進

1986年5月、オリムに入社した谷口史郎氏は、技術者として新たな挑戦を受けることになった。オリムでは、生産性の高い最新式のレピア織機を導入し、時代の先端をいく環境でタオルづくりをスタートさせた。設置された機械は、おもに(株)岩間織機製作所の岩間レピア式革新織機、(株)矢原織機製作所のレピア式革新織機、(株)山田ドビーのジャカード機、愛知ドビー(株)のドビー機などであった。そのため、谷口氏が従来扱ってきたシャトル織機ではなく、シャトル・レス織機の扱い方をマスターする必要があった。

谷口氏は、入社直後から名古屋に赴き、まずは岩間織機製作所で3日間にわたって岩間製のレピア織機の構造、操作方法、メンテナンス方法などについてみっちり講習を受けた。その後、おなじ名古屋に拠点を置く山田ドビーを訪問し、従来のジャカード機（北織式）とはまるで構造の違う山田式ジャカード機（ベルゾール）について2日間の研修を受けた。そして、いったん帰今したのち、今度は地元の矢原織機製作所で5日間にわたり、とくに矢原製のレピア織機の講習を受けた。渡部タオル工場の時代から、使い慣れていたシャトル織機からシャトル・レスの革新織機に一気に代わり、毎日が新しい発見と学びの連続であり、谷口氏のキャリアを大きく飛躍させる機会にもなった。そして、谷口氏の勤勉実直の持ち前の性格がすぐさま成果を出していき、オリム製タオルを技術的側面から支える存在になっていった。

新しい工場には、革新織機のほかに整経機やワインダーも据付けられ、最新設備の量産体制のもとで業務用タオルを中心に生産された。バブル経済の最中でタオル業界は好景気に沸いており、納期に間に合うように平日も土日朝は8時から夜の10時頃まで当たり前のように工場は稼働していた。日曜日は非常勤の従業員を雇って

機械を動かしていた。オリム社長の平林元樹氏の意気込みも相まって、会社は順調に売上を伸ばしていった。



オリムのタオル工場の織機を調整している谷口氏（2003年頃）

しかし、1980年代後半になると、業務用のバスタオルやバスマット、浴巾などが安価な中国製のものに少しずつ浸食されるようになり、オリムでは高付加価値のタオルケットに生産の軸をシフトさせていった。パイルに30/2の2本毛を使用し、デザイン性に富んだ縞柄のタオルケットを生産し、このタオルケットはオリムを代表する製品に成長した。



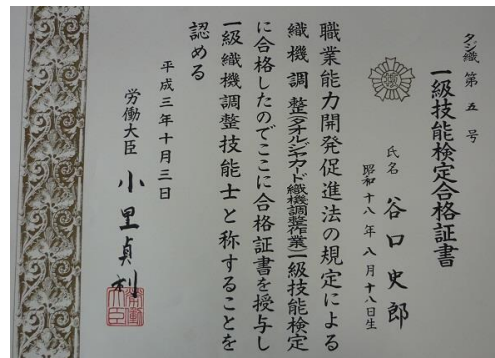
オリムが作成したボーダー見本

その矢先のことである。問屋が持ち込んだタオルケットのデザインをもとにオリムがタオルケットの見本をつくと、それを問屋が

中国で新たに取引を開始したタオル工場に持って行った。つまり、オリムは見本をつくり、中国の他のタオルメーカーがその見本を参考にタオルケットを生産するという、問屋による不公平な取引が横行するようになった。1990年代に入ってタオル業界は輸入タオルの流入による低価格競争に突入し、こうしたオリムの苦い経験は今治の他のタオルメーカーも屈辱ながら味わった。

付加価値の高い、数々の商品を世に送り出す

1991年、谷口氏は技能検定1級に合格し、同時に技能士研究会に入会を果たした。残念ながら、技能検定は1991年に廃止されたため、谷口氏は最後の合格者となった。今治タオルの生産量は1991年をピークに下落し、タオルメーカーも年々減少していった。代わって中国からの安価なタオル製品が国内市場を席卷しはじめ、その勢いは留まることを知らなかった。1999年には輸入タオルが国内市場の半分を占めるようになり、かつて500社以上を数えた四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）の組合員数は230社にまで激減した。ついには、2004年にセーフガードが見送られ、いよいよ今治のタオルメーカーは窮地に立たされた。



技能検定1級の合格証書

タオル業界が厳しい状況に陥るなかで、オリムでは、中国では製造できないような付加価値の高いオリジナルのタオル製造に踏み出した。表1は、谷口氏が技術者として関わったオリムの開発商品一覧である。

1995年に開発された身体を洗うボディウォッシュの「こりこりタオル」（1996年発売）は、緯糸にラミー麻と綿の太番手強撚糸の

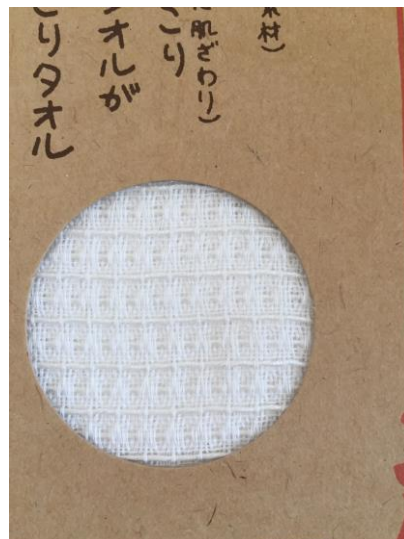
混紡で天然素材100%が特徴であり、網目状の特殊織りである蜂巢織りを採用して泡立ちの良さと速乾性を追求した。この商品の着想は、従来から体を洗う素材はナイロン製が主流であるが、肌に良くないため天然素材のボディタオルをつくろうというシンプルな考えから来ている。技術的な面では、緯糸に太番手と細番手の両方の綿糸を使用するため、カッターのタイミングやレピアのつまむ強さなど難易度の高い調整が必要であり、何度も試行錯誤を繰り返しながら商品に仕上げた。「こりこりタオル」は、発売から3年間で20万枚を売り上げたヒット商品となり、シリーズ商品もいくつか開発され、現在も生産されている。

表1 谷口氏が関わった開発商品

年	商品名	特徴
1996年	こりこりタオル	ボディタオルシリーズ 第1弾 (ラミー麻使用)
1997年	シルクこりこりタオル	ボディタオルシリーズ 第2弾 (絹糸使用)
1998年	美髪美肌	女性用の枕ケース
1999年	赤ちゃんのためのボディタオル	ボディタオルシリーズ 第3弾 (モール糸使用)
	身長計付バスタオル きりんの親子	ベビー用 プリントバスタオル
2002年	おんまぐボディタオル	ボディタオルシリーズ 第4弾 (シュート麻使用)
	たおるマフラー	汗ふき用・日除け用のマフラータオル
2002年	炭のタオル	ボディタオルシリーズ 第5弾 (レーヨン糸使用)
	たおる屋が作ったストール	ひざ掛け用・日除け用・防寒用のタオルストール
2003年	備長炭ボディタオル	ボディタオルシリーズ 第6弾 (レーヨン糸使用)
	女性のためのボディタオル	ボディタオルシリーズ 第7弾 (モール糸使用)
2003年	風のタオル	ハンカチ用タオル
	強者ボディタオル	ボディタオルシリーズ 第8弾 (シュート麻使用)
2003年	強者 定襄 ボディタオル	ボディタオルシリーズ 第9弾 (シュート麻使用)
	布輝取	皮脂取り効果のあるハンカチタオル
2004年	もってこタオル	アウトドア向けタオル (超軽量)
	たおるの帽子	日除け用帽子
2004年	オーガニックのボディタオル (大人用・乳幼児用)	ボディタオルシリーズ 第10弾 (OGモール糸使用)
	たおるマフラーミニ	汗ふき用・日除け用のマフラータオル (エジプト綿使用)
2005年	たおるのスカーフ	汗ふき用・日除け用のスカーフタオル (エジプト綿使用)
	織夢の色 マフラー	汗ふき用・日除け用のマフラータオル (エジプト綿使用)
2006年	オーガニックマフラー (大人・子供用)	ボディタオルシリーズ 第11弾 (OGモール糸使用)
	たおるの帽子・エレガント	日除け用帽子
2008年	たおるのスカーフ・スリム	汗ふき用・日除け用のスカーフタオル (エジプト綿使用)
	身長計付バスタオル そうさんの親子	ベビー用 プリントバスタオル 第2弾
2009年	ぜんぎゅうさんタオル	お地藏さんの柄タオル (丹羽善久様作)
2010年	たおる屋が作ったストール・静電気除去ストール	ひざ掛け・防寒用タオルストール (静電気除去効果)
	鬼の洗濯板	ボディタオルシリーズ 第12弾 (シュート麻使用)
2010年	夢泡布 ボディタオル	ボディタオルシリーズ 第13弾 (ワリー糸使用)
	たおるマフラー・for MEN	汗ふき用・日除け用のマフラータオル (消臭効果)
2011年	くまさん (S・M・L)	ベビー用ぬいぐるみ (OG糸使用)
	汗取りパッド	ベビー用アイテム (OG糸使用)
2011年	抱っこ枕	ベビー用アイテム (OG糸使用)
	ベビースタイ	ベビー用アイテム (OG糸使用)
2011年	ベビーベスト	ベビー用アイテム (OG糸使用)
	たおるマフラー・TEMPO	汗ふき用・日除け用のマフラータオル (UVカット効果)

出典：(株)オリム提供資料「自社開発商品」より作成。


1997年の絹を使った「シルクこりこり」と1998年の枕ケースの「美^び髪^は美^び肌^ば」は、女性をターゲットにした商品であり新たな需要を創造した。1999年のボディウォッシュの「おんまくボディータオル」は、「こりこりタオル」のシリーズで開発されたもので、天然素材の綿100%を使用し、表面にはシュート麻による固めのこり棒^①を、裏面にはシュート麻1本による柔らかなこり棒^②を設け、1枚で硬軟二通りの洗い心地を体験できるボディウォッシュのタオルである（「愛媛経済レポート」1995年、1998年）。2003年の「布^ふ輝^き取^{とり}」は携帯用の皮脂をとり除くハンカチタオルで、綿とマイクロファイバーとベンベルグ^③の3つの素材を織り込んだ特殊な素材を使用しており、高い吸水機能を持つ（「繊維ニュース」2003年）。同年に発売された枕ケースは、緯糸に備長炭を練り込んだレーヨン28%を使用し、炭のマイナスイオン・遠赤外線や消臭機能によって安眠効果を謳った商品である（「海南タイムズ」2003年）。



「こりこりタオル」の生地をよく見ると特殊な網目状の蜂巢織りになっている



「こりこりタオル」のシリーズとして生産された「おんまく ボディータオル」では、茶色のこり棒が織り込まれた特殊な糸を使用し、洗い心地を追求した商品

2004年の「もってこタオル」は、浴巾のサイズで30gという超軽量のタオルであり、薄手だが吸水性を保持するため素材にマイクロファイバー22%とキュブラ39%を使用し、綿糸と交織して生産された。その他にも、綿100%で柔らかいモール糸を使用した「女性のためのボディータオル」や炭を糸に練り込んだ外出用のタオルマフラー、「たおるの帽子」、「高機能スポーツタオル」などが開発された（「海南タイムズ」2004年）。タオルマフラーは、スラブ糸  を経糸に10数本に1本の割合で入れ、パイル織りとガーゼ織りが混ざった複雑な生地で商品化された。そのため、スラブ糸に30/1が連れ込まれて糸切れの原因となり、また製織する際は糸の結び目が大きくなり箆のところ詰まったり、パイルの経糸のテンション調整や開口のタイミングが通常のタオル生地と大きく違っていたり、職人の勘と手業のいる商品であった。このタオルマ



タオルマフラー

フラーも現役のロングラン商品となっている。

こうして、オリムでは2001年の時点で自社開発商品が5%程度だったが、3年後の2004年には30%を占めるようになった（「愛媛経済レポート」2004年）。平林氏は、「従来の商品だと中国に模倣されてしまう。オリジナルなら、ある程度対抗できる」（「愛媛新聞」2007年）と語ったように、自社開発商品の増強はオリムが生き残るための戦略であった。

2004年に開発された「オーガニックのポディータオル」は、農薬や化学肥料を3年以上使っていない畑で育てられた綿花100%を使用し、準備工程の染晒加工においても化学染色を使用せず、オーガニックに徹底してこだわった商品である。表面に細かい突起を施した特殊な織り方を採用し、身体を洗う際に適度な擦り心地も実現した（「日本経済新聞社」2005年、オリム提供資料「自社開発商品」）。

以上のように、谷口氏はオリムの在職中に数多くの新商品の開発に携わり、平林氏を技術面からサポートした。また、平林氏は、オ



谷口氏（左）とオリム社長の平林氏（右）

リジナル商品を流通させる自社ルートの確立も怠らなかつた。新しい商品が完成すると道の駅や土産物店、サービスエリアなどへ精力的に営業に回った。徐々に認知度が上がっていくと同時に、「今治タオル」の産地ブランド戦略の効果も表れるようになり、インターネットを介した通信販売でも販路を開拓できるようになった。

1990年代から始まったタオル生産の競争激化は、タオル業界および各タオルメーカーに対して旧来の体質からの脱皮を強いたが、オリムはオリジナル商品の開発という選択をおこない、うまく変化に対応できた。（次号につづく）

